

## 今、《ツイッター有志による脱原発デモ》が話題です

ウェブサイトを利用し、世界中の知らない人同士がお互いの思いをつぶやく（ツイートする）ことによって触れ合えるツイッターは、最近、若い世代を中心に急速に広まっています。日本のツイッター人口は現在 500 万人以上とされています。

そのツイッターで、今、「脱原発」を合言葉にして大きな輪が広がっています。3月11日の原発事故直後、誰かが「こんなに怖い原発なんか無くそうよ」とつぶやいた書き込みに、沢山の人が賛同の書き込みをし、その意思をデモで訴えようという意見が結集して、4月30日に最初のデモが実現しました。東京・渋谷に集ったこの日の参加者は約 1000 人。

デモは、5月（雨で参加者 300 人）、7月（1000 人）、8月（1200 人）、9月（1600 人）と続いています。11月5日（土）午後、東京・渋谷で第6回目のデモが行われます。



(2011.9.24 ツイッター有志による脱原発デモ・第5回 @渋谷)

去る 9月19日の『さようなら原発・1000万人アクション』では、作家の大江健三郎さんがスピーチで、「私達は民主主義のやり方、デモや署名の活動で訴えることができる」と呼びかけました。私達ひとりひとりの小さなアクションを不断に積み重ねることによって、原発を無くし、安全安心な社会を作っていきます。

### 日本にも「緑の党」 誕生の機運

人類学者の中沢新一さんを中心に、脱原発を掲げて「緑の党」（仮称）を立ち上げる計画が明らかにされました。

世界的な「緑の党」は 1972 年、オーストラリアの自然保護団体発足に端を発し、今は世界各国でエコロジー、反原発、反核、軍縮、反戦、人種差別撤廃などに取り組んでいます。特にドイツでは、福島第一原発事故を受けて「緑の党」の脱原発の主張が国民の強い支持を受け、2022年までに国内にある 17基の原発をすべて停止し、自然エネルギーや天然ガスによる火力発電で代替するという国家計画へと結実しました。日本の「緑の党」構想では、原発のある自治体との連携、欧米の緑の党との連携、住民投票を行う運動などが視野にあるとのこと。

利権とは一線を画し、市民の声をしっかり受け止める活動を期待します。

### 《脱原発を実現し、自然エネルギー中心の社会を求める全国署名》

2012. 2. 28 まで続けられます。一人でも多くの方に広めましょう。

・呼びかけ団体：「さようなら原発」1000万署名 市民の会 (Tel:03-5289-8224)

・呼びかけ人：内橋克人・大江健三郎・落合恵子・鎌田慧・坂本龍一  
澤地久枝・瀬戸内寂聴・辻井喬・鶴見俊輔

呼びかけ団体・ホームページ  
<http://sayonara-nukes.org/>

〔署名用紙をご希望の方は、本紙 (Tel/Fax : 042-725-2545) までご請求下さい。署名用紙は呼びかけ団体のホームページからダウンロードし、プリントアウトしても使えます。〕

【後記】私達は、放射能の心配がない安全安心な生活環境を取り戻したいと願う者のグループです。毎月 1・11・21 日にこのニュースをお届けします。Fax にて集会情報のご投稿をお願いします。

23年8月21日。5回目の警戒区域はとても暑い朝だった。まだ少し空が暗い朝の4時、いつもの様に飼い主依頼の名目で南相馬から入り、浪江町、双葉町を通り常磐線の大野駅の近くに柴犬が沢山いるという情報を元に大熊町へ。この町は原発から3キロ圏内。町に入ると田舎ののどかな景色とは対照的な近代的な総合運動施設が眼の中に。一体どれだけの原発マネーを動かしたのだろう。「原子力は絶対に安全です」そんな言葉を何度聞いたのだろう。田舎の純朴な人たちに嘘をついて。やはり世の中には絶対という言葉はあり得ない。3.11以降何度も聞いた言葉「想定外」。自然の力を舐めていたとしたら日本人は愚か過ぎる。

そんなことを考えているうちに車は大野駅に。先日、原発反対派の大臣が「死の町」と言って辞任したが、表現は全く間違えていない。何もかもが止まってしまい生き残った動物達が食べ物求め荒らし回る。「死の町」と言ったことが問題ではなく、誰が死の町にしてしまったのかということが問題だ。

ペットを置いて行くしかなかった町の人たちを誰が責められる。

大野駅に車を止め、駅の階段を上ったら改札付近に一匹の柴犬が。とても警戒してずっと吠え続けながら距離を置く。更に二匹、皆、散り散りに逃げていく。一時間半追い続けたがとても暑い、防護服も暑い。ここは3キロ圏内、かなり線量も高いのでご飯を沢山、駅に置いてゆっくり辺りを見回すと、小鳥の死骸、何か動物の骨、カラス数匹の死骸、そして色々なボランティア団体の貼紙。「この辺りに犬がいます。」「でもつかまらない」「誰か助けてあげて」。いたたまれない気持ちでの帰り道。猫、猫、猫。みんな細い。でも逃げていく。一緒にここから出たいのに。

翌日、仲間の車と二台で南相馬から大熊町へ。大野駅に着いた途端、柴犬の声、少なくとも5匹。散り散りになられながら4名で追うこと30分。1匹を袋小路に追い詰め自分の手の中に。少し怖がっていたが抱き続けていると段々と安堵の表情に。自由に野山を駆け回っている今の方が幸せかもしれないけど一緒に行こう。自分の出来る限り幸せにしてあげる。1匹が捕まってしまったからか他の子達は全くいなくなってしまったので、ご飯を沢山置き、双葉町、浪江町へ。

警戒区域の住民の方々はずまず人間が避難しろ、2~3日で帰れる、ご飯はあげておく、犬猫はへりには乗せられない、牛豚鶏は殺処分、そして、9月以降は自分のペットも警戒区域外に出すな。一体どれだけの嘘をつかれ、殺処分、出すなど命令され、県外の人々からは放射能を怖がられ蔑まれなければならないのか…。

住民の方々の苦慮、そして残された動物達は、人に愛され、人を癒し、人を守り、人を信じてきたのになぜ区域の外に出してはいけないのか…。

10月13日からまた警戒区域に入ります。

10月6日 森 猛

森さんは、町田市でペットフード専門店で営んでいます。震災以来、動物愛護団体の仲間と一緒に繰り返し「福島原発警戒区域」に行き、動物保護救出のボランティア活動をしておられます。画像など詳細は、森さんのブログをご覧ください。《ブログ：<http://mamechibiclub.blog.fc2.com/>》